109. 宣教団派遣に見る中世ヨーロッパのアジア認識と対モンゴル交渉に関する研究

茨城大学教育学部准教授　　藤崎　衛

概要

中世のヨーロッパ世界にとってアジアがどのように認識されていたのかという問題関心のもと、対モンゴル交渉の主要経路であった教皇庁という参照軸を設定し、中世ラテン・カトリック世界からの宣教活動を宗教面のみならず外交面からも検討するという分析視角を設定した。

主な検討史料は 13 世紀半ばから後半にかけての教皇とイルハーン朝君主の間の書簡とし、目的は書簡内容の背後にある事実関係の確定、強調や歪曲を伴うレトリック、相互の理解、むしろ誤解を明らかにすることである。そして教皇庁がどのような意図や使命感に基づいてモンゴル、特にイルハーン朝をキリスト教世界に組み込もうとしたのか、またそのためにどのような文書上のレトリックを駆使したのかを解明し、その作業の過程において、ヨーロッパのアジア認識のあり方を浮き彫りにする。本研究の成果はドイツや日本で開かれた国際研究集会において公表することができた。これらは論文として刊行する準備を進めている。

歴史学の分野では世界的にグローバルヒストリーへの関心が高まっている。ヨーロッパの研究者は本研究に強く興味を示してくれており、今後はより組織化された共同研究を推し進めることが可能だと思われる。その際には東洋史研究者を巻き込み、中世におけるアジアのヨーロッパ認識をこれまで以上に包括的に解明することによって、より包括的な中世のグローバルヒストリーを実現することができるだろう。財団からの助成金はその重要な端緒を開いてくれるものであった。

背景および目的

近年、日本における西洋史研究は欧米の研究機関や研究者との交流の進展や海外での研究発表の機会増大により、国際水準の成果を生み出しつつある。もっとも、そのような水準の研究は「自らの過去」を探求しようとする欧米の研究者と同じ問題関心に概ね沿っているように思われる。他方、日本人またはアジア人として西洋史研究に従事することの意義を問う声は、以前から已むことはない。このような状況のもと、必ずしも欧米に発するものではない問題関心に基づく研究課題に取り組み、その成果を日本から発信することは、日本における今後の西洋史研究にとって大きな推進力となると考えられる。

本研究は代表研究者がこれまで蓄積した西洋中世史の知見をもとに、「中世のヨーロッパ世界がアジアをどのように認識していたのか」という大きな問題を設定し、その一端を解明することを目指す。特にヨーロッパ側からのキリスト教宣教団派遣の意図や実態を明らかにすることにより、ローマ教皇権をはじめとする中世ヨーロッパ世界のアジア認識に光を当てる。この課題は日本人・アジア人でありながら西洋史研究に従事する者としての問題関心に基づくものである。同様のテーマはたしかに以前から欧米でも関心を集めてきたが、ローマ教皇庁が主導したモンゴル帝国内の諸ウルスへの宣教団派遣を通して見えてくるアジア認識のあり方は、従来の研究では十分に明らかにされてきたとは言えない。本研究はその欠落を補うことになる。

方法

13 世紀にモンゴル勢力がユーラシア大陸にまたがる帝国を築いた頃、各ウルスが各地に同化しつつあったが、同じころヨーロッパではフランシスコ会やドミニコ会といった托鉢修道会が誕生し、教皇権との強力な紐帯のもと、ヨーロッパ外での宣教活動にも従事するようになった。中世のラテン・カトリックの宣教活動はこれまで欧米の学界において「各修道会の歴史」の枠組みの中で研究されてきたが、本研究では対モンゴル交渉の主要経路であった教皇庁という参照軸を設定することにより宣教団派遣を宗教面のみならず外交面からも検討するものである。研究の遂行にあたっては協同研究者と連携して研究上の支援と示唆を得ることとする。

本研究では文献史料の分析を主とし、その対象は主に 13 世紀半ばから後半にかけての歴代教皇がイルハーン朝君主や宣教使節団に宛てた書簡、あるいはイルハーン朝君主が教皇や西欧の君主に宛てた書簡とする。史料集としては Lupprian (1981)が公刊した教皇とイスラーム君主の書簡史料集が有用であるが、網羅的ではないため、18 世紀に編纂された Sbaralea (1765)やその他フランシスコ会関連の教皇文書集やその他の史料集を利用する。

史料の分析にあたっては、それらが宗教的性格と外交的性格の両面を備えているという点に最大限の注意を払い、書簡内容の背後にある事実関係を確定する作業とともに、強調や誇張、意図的な不言及などのレトリック、そして宗教用語の理解または誤解を明らかにする作業を進める。特にレトリック分析については、協同研究者のゲオルク・シュトラックが専門にするところであり、代表研究者の史料分析について助言をもらう。

ラテン・キリスト教世界からモンゴルへの宣教団派遣の実際とそれに伴って発給された書簡を検討するにあたっては、言うまでもなくモンゴル諸地域・諸宮廷における宗教事情の把握が不可欠である。これについては国内外の研究を整理し、13 世紀後半のイルハーン朝においても、君主ごとにどのような宗教的背景があったのか、またキリスト教に対する理解がどの程度のものであったかという点までも明確にする。そのうえで、教皇庁がどのような意図・使命感に基づいて、そしてどのような文書上のレトリックを駆使してモンゴル、特にイルハーン朝をキリスト教世界に組み込もうとしたのかを解明する。

結果および考察

代表研究者は研究を進める途中及び終了後の 2015 年 11 月に、ドイツのミュンヘン大学で中世教皇庁研究を主題とする国際研究集会に参加し、"The Curia and the Khan – A Franciscan Mission to the Il-khan Abaqa"（教皇宮廷とハーン―イルハーン・アバカとフランシスコ会）と題する研究発表を行った。この研究集会は協同研究者ゲオルク・シュトラックが共同代表者を務める研究グループ「中世教皇宮廷における紛争と交渉のルール（12～15 世紀）」により組織されたものである。また、2017 年 2 月には立教大学で行われた中世教皇庁を主題とする国際研究集会において、"The Medieval Papacy and Asia: Mission, Christianization, and Conversion"（「中世教皇権とアジア―宣教、キリスト教化、改宗」）と題する発表を行った。両発表において、13 世紀半ばから後半にかけての教皇書簡から読み取れるアジア認識のあり方を検討した。具体的な作業として、ヨーロッパへの侵入後、恐怖の対象であり敵とみなされたモンゴル人ないしタタール人が 13 世紀後半の間にどのようにして外交交渉または宣教の対象となったのかを、当時のイスラーム諸王朝やビザンツ帝国などの勢力図を踏まえつつ教皇書簡から読み解き、その際史料に現れるアジア認識に関わる文言を抽出・分析した。

この分析により、当時におけるヨーロッパの代表者のひとつである教皇権にとって、13 世紀半ばまでは噂と恐怖の対象であったのが、中東のパワーバランスの変化に伴い、1260 年代からモンゴル勢力から軍事的協力を求められる外交の段階へと入り、書簡の往来がみられるようになったこと、その頃からモンゴルは軍事的関心を保ち続けたのに対して、教皇権は宣教への関心を強め、あくまでも宗教的な関心に基づいてモンゴルとのやり取りを行ったこと、それゆえ両者の間に思惑のずれが存在したこと、などが明らかとなった。研究の結果明らかとなったこうした「ずれ」は多文化・多言語間のコミュニケーションの問題の一事例として他分野の研究者の関心も引くこととなった。このように今後のさらなる共同研究への見通しが得られたことは大きな収穫である。

（完）

発表論文及び口頭発表

1） Fujisaki, Mamoru, "The Curia and the Khan – A Franciscan Mission to the Il-khan Abaqa," *DFG Netzwerk Stilus curiae. Spielregeln der Konflikt- und Verhandlungsführung am Papsthof des Mittelalters (12.-15. Jahrhundert)*, Fourth Workshop, 7 November 2015, Ludwig-Maximilians-Universität München, Munich (Germany)

2） 藤崎衛（監修及び改題）「第一リヨン公会議（1245 年）決議文翻訳」『クリオ』第 30 号（2016 年 5 月）、100-127 頁

3） Fujisaki, Mamoru, "On the servitia of consecration in thirteenth-century curia," *DFG Netzwerk Stilus curiae. Spielregeln der Konflikt- und Verhandlungsführung am Papsthof des Mittelalters (12.-15. Jahrhundert)*, Fifth Workshop, 3 Dicember 2016, Ludwig-Maximilians-Universität München, Munich (Germany)

4） Fujisaki, Mamoru, "The Medieval Papacy and Asia: Mission, Christianization, and Conversion," *International Symposium Medieval Papacy: Governance, Communication, Cultural Exchange*, 19 February 2017, Rikkyo University, Tokyo (Japan)

5） Fujisaki, Mamoru, "A Franciscan Mission by Pope Nicholas III to Il-khan Abaqa," in *Religious Interactions in Europe and the Mediterranean World: Coexistence and Dialogue from the 12th to the 20th Centuries*, ed. Katsumi Fukasawa, Benjamin J. Kaplan, Pierre-Yves Beaurepaire, Routledge 2017 (in printing)

引用文献

1） Lupprian, Karl-Ernst, *Die Beziehungen der Päpste zu islamischen und mongolischen Herrschern im 13. Jahrhundert anhand ihres Briefwechsels*, Città del Vaticano 1981 (Studi e testi, 291).

2） Sbaralea, Johannes Hyacinthus (ed.), *Bullarium franciscanum romanorum pontificum*, vol. 3, Roma 1765.